



BECHSTEIN KLAVIERSCHULE

ピアノ教育の現場から——

ベヒシュタインピアノの特性を活かしながら、音楽をより深く理解するピアノ教育を実践している内藤晃先生と石本育子先生のお二人による「ベヒシュタイン シューレ誌上特別レッスン」。4回連載の総集編となる今回は「ピアノでオーケストラを」をテーマにお届けします。

BECHSTEIN Column



ベヒシュタインの王冠

「箔をつける」という表現が日本語にあり、貫禄が増すとか高い値打ちがつく、評価が高まるといった意味で使われます。ドイツ語でこれをどう言うのかを辞書で調べてみると、「krönen」=「王冠を戴かせる」と出ていました。

「王冠」が、ベヒシュタインのロゴマークにここ十数年来採用されています。その前からもコンサートグランドのサイドやカタログには不定期に付いてはいましたが、楽器の鍵盤蓋や棚板正面などにしっかりと定着したのは2005年頃からだだったように記憶しています。当初は何か取って付けた感じで、王冠の無いすっきりした「C.BECHSTEIN」がカッコいいなと思っていましたが、逆に今は無いとスッキリこない。王冠をトップにしてロゴが二等辺三角形となり、マークとしての座りというイメージもいい。

「王冠を戴かせる」=「箔をつける」で楽器自体の本質的なものが変わるわけではないのですが、受けるイメージは確実に変わった(と思う)。ベヒシュタインは1853年の創業以来、プロイセン王国や英国、ロシア、その他の王室や貴族の御用達(Hoflieferant)として、またリストやドビュッシーをはじめとするピアニストや作曲家らに楽器を弾いてもらい評価、愛用されてきました。それらをイメージさせる王冠をロゴマークに組み入れることによって正統な、高貴な、選ばれし楽器であると一般に認識してもらう。そしてそれに見合う、値する楽器である、と自分も日々感じ、そして信じていくために何ができるか?と考えています。

ベヒシュタイン・ジャパン
調律師 尾山 格

ハンマーの打弦をイメージする。



内藤 晃
(ピアニスト)



石本 育子
(たかまつ楽器ピアノ講師)



加藤 正人
(ベヒシュタイン・ジャパン代表)

石本: たかまつ楽器ではこの時期青い鳥コンペティションが近づき生徒さんたちはとても頑張っています。

特に連弾部門に出場の皆さんは日頃一人で弾いているので、よいアンサンブルを目指すために苦勞しているようです。

やはりまずは

- ① 2人で表現する全体像を理解すること
- ② オーケストラ曲のピアノ版の場合は如何にそこを表現できるかが鍵となることでしょうね。

内藤: ただ、どんなタッチで弾いてもピアノの音色はピアノで、ヴァイオリンやクラリネットの音色が実際に出るわけじゃありませんから、どのようにオーケストラのような響きの錯覚を作り出すかということになります。

石本: 聴き手にそう「錯覚」してもらうんですね。それは内藤先生の書かれたベヒシュタインジャパンから出ている小冊子「ピアノでオーケストラを」にとっても興味深く書かれていますね。

内藤: 僕は、オーケストレーションというのは絵画の遠近法みたいなものだと思っています。近くに聴こえる楽器と遠くに聴こえる楽器がある。それを、くっきりしたタッチと淡いタッチの使い分けで描き分けていきます。

石本: はい、単に「強弱」の差というだけでは、描ききれない表現があって、それに答え得る楽器と演奏者の工夫が必要だと思います。

内藤: この「淡いタッチ」というのが曲者で。鍵盤部分の雑音成分が出ないように弾くわけですが、慣れるまでなかなか難しいようです。そして、タッチのコントラストによる遠近感、オーケストラの曲に限らず、どんな曲を弾くのにも最も大事になってくるテクニックのひとつですね。



内藤 晃
(ないとう あきら)

ピアニスト、指揮者、作編曲家。東京外国語大学ドイツ語専攻卒業。在学中よりピアニストとして演奏活動を始め、桐朋学園大学指揮教室、ヤルヴィ・アカデミー(エストニア)などで指揮の研鑽も積む。弾き振りを含む多彩な演奏活動とともに、「もっと深い音楽体験」を共有すべく、ユニークな発想でレクチャーや執筆を行う。月刊音楽現代に「名曲の向こう側」を連載、訳書にA.ゲレリヒ著「師としてのリスト」(近刊、音楽之友社)、校訂楽譜に「ジョン・アイランド ピアノ曲集」「13人の女性によるピアノ小品集」(カワイ出版)などがあるほか、音楽雑誌やCDライナーノートの執筆も多い。札幌シンフォニエッタ、アピアント交響楽団、杉並グース合奏団などを指揮。2014年、全日本ピアノ指導者協会から新人指導者賞受賞。一次資料から作曲家の美意識を読み解く独自のレッススが各地で好評を得ている。CDに「Primavera」(レコード芸術特選盤)「言葉のない歌曲」(同準特選盤)などがあるほか、マリナ・吉川雅夫氏や作曲家春畑セロリ氏のCDでピアノを務め、一流ソリストや作曲家からも厚い信頼を寄せられている。主宰ユニット「おんがくしつりオ」では教育楽器によるエキサイティングなアレンジが人気を博し、全国各地に招かれている。
www.akira-naito.com



石本 育子
(いしもと いくこ)

静岡県浜松市出身。信愛学園高等学校音楽科を経て武蔵野音楽大学音楽学部声楽学科卒業。古屋豊、川内澄江の各氏に師事。東京・浜松・香川において数多くのコンサートに出演するだけでなく、自主企画の演奏会を立案運営。独自の指導法による連続講座をピアニスト内藤晃氏と共に汐留ベヒシュタインサロンにて開催。たかまつ楽器青い鳥音楽教室主事。青い鳥マスタークラス主任講師。四国二期会会員。全日本ジュニアクラシック音楽コンクール及び東京国際ピアノコンクール審査員。



加藤 正人
(かとう まさと)

ドイツ・ピアノ製作マイスター称号を取得
現在ベヒシュタイン・ジャパン代表取締役社長

石本: はい。

淡いタッチを感覚として意識するために、内藤先生がいつもおっしゃっている①戻ろうとする鍵盤の動きを指先で感ずることや②「指や腕をどうする?」ではなくハンマーがどうやって弦を打つか?をイメージできることが大切ですよね?

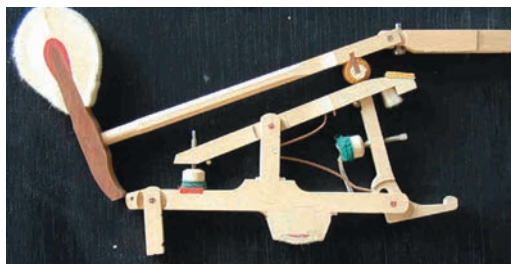
内藤: そうですね! 鍵盤の先についているハンマーの動きを指先で感じられることで、弦を直接爪弾いていくような感覚が生まれます。喩えるとすれば、ハンマーのついたアクションというまどろっこしい代物を使って、ハーブを遠隔で弾いてるような感じですかね。

加藤: 現代のグランドピアノは創業時にカール・ベヒシュタインが採用した「突き上げ式シングルエスケープメント」ではなく、エラールが発明した「ダブルエスケープメント」という連打に有利なアクションが一般的に使われます。当時使用されていたシングルエスケープメントは、連打性という意味では優位ではなかったのですが、鍵盤からハンマーまでの槌子の数が少ないので、鍵盤でハンマーの打弦の瞬間を感じ取ることが容易です。この点はショパンがエラールよりプレイエルを好んだ理由の一つになるのではないかと思います。しかし、指先に神経を集中させれば、現代のダブルエスケープメントアクションでもハンマーの打弦の瞬間を感じ取ることができます。ハンマーの接弦時間を決める理想的な整音状態、また、アクションの調整が正確であるほど、その打弦の感触を掴みやすくなります。打弦タイミングを捉える指先の意識は演奏表現にとっても重要でしょう。強弱の微妙な変化、発声タイミング、止音タイミングのコントロールが抑揚感・音色作りの要になるはずですよ。

内藤: とりわけベヒシュタインでは、声部ごとにタッチを弾き分けるとそれらが塊にならず分かれて聴こえてくるので、生き生きとしたアンサンブルに聴こえて面白いですね!



ベヒシュタイン創業期のシングルエスケープメントアクション



現代のダブルエスケープメントアクション

内藤先生、石本先生がお感じになっているベヒシュタインピアノの特性を活かしながら、実際どのように生徒さんたちに音楽を理解させていらっしゃるのか、誌上レッスンと動画をリンクして公開いたします。

ピアニストとピアノ製作マイスターの対話 Vol.3への前奏曲 小さな勉強会

「大海BachからBeethovenへ」

ピティナ・ピアノセミナーより

日時：2020年8月20日(木)

会場：汐留ベヒシュタイン・サロン

講師：ピアニスト 京都芸術大学非常勤講師 侯野修子



侯野先生 レクチャーコンサート

第3回目となるピアニストと製作マイスターのレクチャーシリーズは、今年4月27日に、ベートーヴェン生誕250周年を記念とし、ピアノソナタにおける彼の作品の特徴「Bachからの影響」「室内楽的視点」の2点から考察される予定でした。しかし、新型コロナウイルス拡大のため、残念ながら来年秋へと延期になり、今回は「Bachからの影響」に焦点を当て、第3回目のプレリウドとして、勉強会を開催されました。

はじめに侯野先生は、ベートーヴェンがバッハに結びついた経緯を次のように語られました。「ベートーヴェンは11歳の頃に、バッハの孫弟子であるクリスティアン・ゴットロープ・ネーフェに師事し、クラヴィア奏法習得のために、彼から全調で書かれたバッハの《平均律クラヴィア曲集》の課題を与えられたことで、24の各調の性格とその其々調性に適したテーマに直に接することになりました。《平均律クラヴィア曲集》は、平均律という調律法によって発生した各調の性格の違いに注目して書かれた曲集とも言えます。ベートーヴェンは、この経験の中で、バッハの「調性の扱い方」や構造的な「作曲技法」を学び、少なからず影響を受け、そしてその影響は、彼の様々な作品の中からもうかがい知ることができると、ベートーヴェンが幼い頃からバッハの『平均律クラヴィア曲集』を勉強したことによって「調の性格」と「構造的技法」を体得していたことがわかりました。

次に、ピアノ製作マイスターの加藤より、「調性について」プロジェクターを使ったレクチャーが行われました。

「平均律」と「不等分律」「ミントーン」は長3度の響きの違いがあるため、調律法によってCから離れるほど調性の色合いの変化が大きく感じられると説明しました。つまり調号が増えていくに連れて音の揺らぎが増えて聞こえてしまう、ということだそうです。

そして実際に純正律で調律したピアノを用意し、侯野先生に《平均律クラヴィア曲集第1巻》より〈11番〉のフーガF-durを弾き比べていただきました。侯野先生は、不等分律のピアノでの印象を、「明るい雰囲気」とFとAの「長3度のビート(揺らぎ)が少ない」「音程のハモリがはつきりする」と感じる、と平均律で調律されたピアノとの比較を平易に説明されました。

次に侯野先生は、ベートーヴェンの人生と作曲理念の変遷が表れている《32のピアノソナタ》に触れ、彼が若干10代にして影響を受けた、バッハの「調の性格」と「圧縮の技法」について語られました。ベートーヴェンのピアノソナタを、バッハの《平均律クラヴィア曲集》からそれぞれ抜粋し、比較しつつ、バッハからの影響が見られる特徴について実践的なレクチャーが行われました。

はじめに「調の性格」について

c-mollとf-mollは、ベートーヴェンにとって重要な調だと言われています。c-mollは《運命》《悲愴》《3つのピアノトリオ》の第3曲などが挙げられ、f-mollは《熱情》《弦楽四重奏曲セリオーソ》第11番《ピアノソナタ》第1番などが挙げられる。そして、c-mollは、人間の抗えない宿命

や、運命的なものをドラマティックに表現しており、f-moll は、シリアスで絶望感のある調である。この二つの調性を持つベートーヴェン作品の中には、曲中や楽章において、田園的な雰囲気を持つF-durと、温かみのあるAs-durが効果的に使われている箇所が見られ、c-moll、f-moll から、これらの調への転調は、まるで救いのような印象となっている、と侯野先生はベートーヴェンが用いる調性の特徴を考察されました。

【譜例1】にある《ピアノソナタ第1番》の3楽章はf-moll で始まるが、Trioに移る際にF-durへ転調すると例を挙げられました。

【譜例1】ベートーヴェン:《ピアノソナタ第1番》Op.2-1 第3楽章 mes.31-49



このような転調について侯野先生は、バッハの《平均律クラヴィア曲集第1巻》より12番f-mollのフーガ(F-dur・As-durへ転調)でも見られ、ベートーヴェンは、調性を考慮して最も適した部分で効果的な転調を採用する手法を、バッハの平均律から学んだものと考えられる、と具体的な例を用いて説明されました。

次に「圧縮の方法」について

侯野先生は、ベートーヴェンの音楽を支える要素として、「激しいコントラスト」「緊張感」「構築感」「急激なダイナミックの変化」「突然の沈黙(休符)」に加え、「圧縮」が挙げられる、と説明されました。バッハのフーガの中には、1つのテーマが終わりきらないうちに次のテーマを重ねる、ストレッタ(stretta)と呼ばれる技法がよく使われ、このテーマが入るスパンを圧縮し、ストレッタを使うことで緊張感を生み出す効果がある、と「圧縮」による効果を説明されました。【譜例2】(アルト、テナー、バス、ソプラノの順にストレッタ)

【譜例2】バッハ:《平均律第1巻》より〈1番〉フーガ BWV846 mes.14-8



そして、【譜例3】のように、テーマ自体が圧縮されることもよくあるそうです。

【譜例3】

バッハ:《平均律第2巻》より〈10番〉
フーガ BWV879 冒頭

PRAELUDIUM X.

この技法をベートーヴェンは、【譜例4】【譜例5】にある、《ピアノソナタ1番》の第1楽章冒頭や、《月光》の第3楽章に使われている、とベートーヴェンの《ピアノソナタ》の多くに「圧縮」の技法が使われていることを説明されました。

はじめのテーマは2小節で1つのテーマだが、次の段からはテーマの圧縮がされています。

【譜例4】

ベートーヴェン:《ピアノソナタ1番》Op.2-1
第1楽章 冒頭

SONATE
Joseph Haydn gewidmet
L. van Beethoven, Op. 2 N° 1

Allegro

【譜例5】

ベートーヴェン:《ピアノソナタ14番》
Op.27-2 第3楽章 冒頭

Presto agitato. *Allegretto da capo.*

このような構造的な裏付けがあると、ディナーミクが説得力を持ち、より緊張感、高揚感が生まれる、とベートーヴェンが用いる「圧縮」の技法を説明されました。

また、ベートーヴェンの後期のソナタの最も重要な部分にフーガを置いているところからも、バッハの影響が見られる、話されました。

俣野先生は、次回第3回に向けて次のように話されました。「ベートーヴェンは激しい性格であったが、自然を愛し、家庭に憧れ、人生への自問を繰り返す人間味の溢れた人物であった。そして、作曲家の性

格は、必ず作品に現れるものであるため、ベートーヴェンの人生と、ピアノソナタにおける室内楽の影響を今回の内容と絡めてお話する予定です」

最後に《ピアノソナタ1番》より第2楽章を演奏されました。自然の中を手を後ろで組みながら歩き、自己と向き合うベートーヴェンの絵画がよくみられるが、そのようなヒューマニティーを感じられる曲である、と俣野先生はこの曲についての印象を話されました。

田園を散歩するような穏やかなF-durの色合いが感じられる、深みのある温かい演奏でした。

【引用楽譜】

・L.v.Beethoven: Piano Sonata No.1 Op.2-1
https://imslp.org/wiki/Piano_Sonata_No.1,_Op.2_No.1_%28Beethoven,_Ludwig_van%29
Sonaten für Klavier zu zwei Händen, Bd.1
Leipzig: C.F. Peters, n.d.(ca.1920). Plate 10543, 10555-56.
・J.S.Bach: Prelude and Fuga in C Major
[https://imslp.org/wiki/Prelude_and_Fugue_in_C_major%2C_BWV_846_\(Bach%2C_Johann_Sebastian\)](https://imslp.org/wiki/Prelude_and_Fugue_in_C_major%2C_BWV_846_(Bach%2C_Johann_Sebastian))
New York: G. Schirmer, 1893. Plate 11015.

・J.S.Bach: Prelude and Fuga in E minor
[https://imslp.org/wiki/Prelude_and_Fugue_in_E_minor,_BWV_879_\(Bach,_Johann_Sebastian\)](https://imslp.org/wiki/Prelude_and_Fugue_in_E_minor,_BWV_879_(Bach,_Johann_Sebastian))
Bach-Gesellschaft Ausgabe, Band 14
・L.v.Beethoven: Piano Sonata No.14 Op.27-2
[https://imslp.org/wiki/Piano_Sonata_No.14%2C_Op.27_No.2_\(Beethoven%2C_Ludwig_van\)](https://imslp.org/wiki/Piano_Sonata_No.14%2C_Op.27_No.2_(Beethoven%2C_Ludwig_van))
Ludwig van Beethovens Werke, Serie 16:



石本先生



はるかさん



ほのかさん

石本先生
レッスン動画

<https://youtu.be/dCcrfPKzouY>
QRコード読み取りアプリでご覧ください。

ピアノでオーケストラを（基礎編） 連弾を楽しもう!!

兄弟姉妹でレッスンに来てくれている生徒さんも少なくありません。せっかくだからと連弾等二人以上のアンサンブルを楽しんでもらっています。この姉妹さんもそういうお二人です。

ブラームス作曲ハンガリー舞曲第6番の連弾版を弾いている姉妹のレッスン。動画にもあるように、オーケストラ版を聴いてそれぞれが弾いている声部はどんな楽器が担当しているのか?を見て考えてくるのが課題。



以下は動画後のレッスンです。

石 本：楽器を意識した後の演奏、どうだった？楽譜の見方、ピアノを弾く時の考え方を〈私の左右の手〉ではなくて（ユニゾンも含め）メロディ、パス、対旋律等で考えてみてほしいんだけど。

はるかさん(妹)：オーケストラを聴いてから、楽譜の見方が少し変わった気がします。

ほのかさん(姉)：私は中学校で吹奏楽をしているんですが、合奏している感じを思い出しました。

石 本：そうね、ピアノを弾くときはどうしても「右手は何の音を弾いて左手は何の音を弾いて…」みたいに分けて考えがちだけど、それだと出てきた音楽が平面的で表情のないものになるよね。

はるかさん：よく聴くと同じ旋律を複数の楽器が弾いているのがわかり新鮮でした。

ほのかさん：私はsecondなんですけど低音はコントラバスだけでなくティンパニ等の打楽器も一緒に鳴っていて左手のバス音は、強さや衝撃のような音も出す必要があるんだなあ気づきました。

2人でやってみる

2 人：難しいけど面白い!!

石 本：そうね。次は動画からだけでなくスコアも研究してみましょう。もっと新しい発見がありますよ。

内藤晃 先生 特別誌上レッスン④

ピアノでオーケストラを (応用編)

内藤：日はフランツ・リストがやっていたレッスンを再現してみよう。リストは、ベートーヴェンのシンフォニーをピアノに編曲しているけれど、それを使って、生徒にピアノで弦楽器や管楽器の質感を表現する練習をさせていたんだ。

Hさん：へえ、すごいですね！

内藤：シンフォニーの7番の2楽章を使って、やってる。まず、冒頭。「ター、タツ、タツ、タタタ」という旋律が出てくる。弦楽器がテヌート(ター)、スタッカート(タツタツ)、ポルタート(タタタ)を奏でる。ポウイングが変わるよね。スタッカートでは弓を返す(デタツシェ)し、ポルタートでは同じ方向にひと弓でいく。これをピアノで弾き分けよう、というのがリストの課題なんだ。

(譜例1)



Hさん：♪ター、タツ、タツ、ター、ター

内藤：それだとポルタートじゃなくて普通にテヌートで弓返してるように聴こえるよ！

Hさん：え〜っ…(試行錯誤)

内藤：それから、この楽章の最後。旋律がリレーのように違う楽器に受け継がれていくところ。メインで聴こえてる楽器は、フルート→クラリネット→ホルン→弦楽器のピチカート。これを弾き分けてみよう、という課題をリストが出している。

(譜例2)



Hさん：♪ター、タツ、タツ、ター、ター

内藤：ホルンはそんなに歯切れよくなるかな？

Hさん：えーっと…

内藤：管の長いホルンは、構造上、ほかの楽器よりも音のキレは鈍い感じ。だから、スタッカートにしても、少しだけ音価が長い感じになる。このことをリスト自身がレッスンで指摘しているんだ。

Hさん：すごーい…

内藤：ものまねタレントになったつもりで、各楽器の特徴、アタックの輪郭とか、音が出たあとの軌跡の感じを、ピアノで真似してみよう。音色は違うけれど、音のあたりは真似できるから、そうやってタッチの種類が増えていくと、オーケストラみたいな立体感が出てくるはず！

Hさん：がんばります！

内藤：作曲家自身がピアノ曲にもオーケストラ曲にもしているような作品を、ぜひ弾いてみてね。どこにどんな楽器をあてているかというオーケストレーションに、作曲家が作品にいただいていたイメージに近づくヒントが隠れているはず！

イラスト：いとう まりこ



内藤先生



Hさん



内藤先生
レッスン動画

<https://youtu.be/j82gvJssZqM>

QRコード読み取りアプリでご覧ください。

*内藤晃先生が翻訳を担当した、ウィルヘルム・イェーガー編「師としてのリスト〜弟子ゲレリヒが伝える素顔のマスタークラス」が、今春、音楽之友社から出版される予定です。今回の内容も、この本に基づくものです。

株式会社ベヒシュタイン・ジャパン

〒157-0061 東京都世田谷区北烏山9-2-1
TEL: 03-3305-1211 FAX: 03-3305-9931
HP: <https://www.bechstein.co.jp/>

発行人 加藤正人・営業企画室

